

書写の要素 文字の中心

山梨大学教授 宮澤 正明

今回は、文字の中心について取り上げます。

「文字の中心」とは、字形の中心軸のことで、古来、字形全体を揺るぎのないものにするための要素として重視されてきました。今日の書写学習においても、「文字の中心」を意識して書くことは、字形を整え安定させるための重要な要素の一つとなっています。

文字の中心には上下幅の中心と左右幅の中心の二通りが考えられますが、漢字や仮名は縦書きで発展してきたことから、縦の行に字形の中心を合わせる方法としてとらえられてきました。したがって、書写の要素としての「文字の中心」とは、字形の左右の幅に対する中心を意味するものとらえてよいでしょう。

漢字には、中心がわかりやすいものとそうでないものがあります。例えば、「十・山・中・田」のような、単独・左右対称形の文字や、一画目の始筆が中心線上にある文字、中心線上に目安になる点画や接する部分（接筆）、交わる部分がある文字は中心がわかりやすいと言えます。それに対して、例えば「七・夕・子・心」のように、中心がわかりにくい単独・非対称形の文字も存在します。

は三画目の始筆がそれぞれ中心線上に近くなる、などです。

七 夕 子 心

○一画目の始筆が中心線上に位置する文字

一画目の始筆が文字の中心上にある場合は、中心を取りやすいようです。しかし、これを外すと字形は整わなくなるので、不用意に書き始めないことが大切です。

上 水 字 主

○中心線上に目安となる点画や接筆・交点がある文字

二画目以降に、中心線上に点画や接筆・交点があると、それをめざして一画目を書くことができるので、比較的字形を整えやすくなります。

木 雨 会 父

○中心線上に目安となる点画や接筆・交点がない文字

対称形でも非対称形でも、中心に目安のない漢字は多くあります。例えば「口」は、単独・対称形であっても、中心に目安となる点画は存在しません。やはり、いったん外形を想像した上で一画目の位置を慎重に見極めることが重要になります。

口 西 氏 長

また、多くの漢字はさまざまな部分が複雑に組み合わさっているため、その中心をとらえることは困難です。特に左右・内外の組み立ての文字の中心は見極めにくいと言えるでしょう。ここで、文字の中心のとらえ方を整理してみましょう。

○左右対称形の文字

左右対称の文字はそれほど多くはないのですが、左右がほぼ同じ形をしているので、文字の中心はわかりやすいと言えます。ここで確認しておきたいのは、その特徴として横画が右上がりになること、点画から点画に移動するとき終筆に「はね」や「払い」などの連続的筆使いが生じることなどから、厳密には幾何学的対称図形にはなっておらず、視覚的重量も左右均等ではないということです。この点は、水平線を基調とする活字の明朝体・ゴシック体などと異なるので注意が必要です。

出 目 金 門

○非対称形の文字

漢字や仮名はほとんどが非対称形の文字と言えます。次の字例などは、一体どこから書き始め、どこに中心を位置づけたらよいかがはっきりしません。このような文字の中心をとらえるには、まず外形をとらえた上で中心を見極める方法、基準となる文字に中心線を引きそれに対して点画や接筆などがどの位置にあるかを理解する方法などがあります。例えば、「七」は二画目が中心線よりわずかに左に位置する、「夕」は二画目の左払いと三画目の点との接筆部分、「子」は二画目の始筆、「心」

○左右の組み立て文字の場合

左右の部分が等分割されている場合は、偏の右端を中心線上に位置づけるのですが、次の字例のように左右が一对二、二対一に分割される場合は注意が必要です。

体 海 引 刷

○その他中心を取りにくい文字

内外の組み立ての漢字は中心がわかりにくいようです。特に「にょう」の漢字はその代表例です。「道」で中心を考えてみましょう。しんにょうは左側と下側の部分を占めていますが、右払いの上方にも隙間を作ることが要求されることになります。そこで、「首」の左右の幅を三等分割した左三分の一の所を全体を中心にするようにしましょう。次の図解で確認してください。

道 道

文字の中心は、必然的に行の中心との関係が生じます。文字の中心の感覚を高めることができれば、文字の中心と行の中心を合わせて書く「配列」の要素はクリアできると言っても過言ではありません。なお、横書きが増えた今日、文字の上下幅の中心に対する感覚も高めておく必要があります。これは今後の課題であり、研究の余地が十分あります。